
水底の夢

淡海いさな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水底の夢

【Zコード】

Z9066V

【作者名】

淡海いさな

【あらすじ】

水力をもつて栄えるアイレンベルク。けれど、住民たちが知らぬ間に妖しい影が忍び寄っていた。そこへ訪れる獅子の頭を持つ旅人。男は街の少年と出遭い、友情を育み、そのうちに街に起こった異変の原因へと迫っていく。

改稿履歴（前書き）

改稿の履歴と変更された内容をお知らせするページです。

改稿履歴

最近の改稿内容

2011.09.08(木)

第1部 獅子と少年

ディアロがやつてきた街を「パッフェルベル」から「パルマ」に
変更。

他、一部誤字などを修正。

過去の改稿履歴

オマケ

200文字以上ないと投稿できないので、文字数の水増しとして、
この世界の度量衡に関する設定を載せておきます。

この世界で最も一般的に使用される度量衡（単位系）は、大工や
指物師としても優秀な技を持つドワーフ族が基準になっています。
長さの単位を例に取ると、日常でもっとも頻繁に使われる「スー」
という単位は「ドワーフの成人男性の足の大きさ」に由来するとさ
れています。

ただし、現実には、同じくドワーフ族の「歩幅」に由来する「ブ
ージョ」という単位と関連付けられ、「スー」は「1/4ブージ
ョ」と定められています。

「1ブージョ」は、「まず足を揃え、そこから左足を踏み出し、次に右足を踏み出した時の、起点から踏み出した右足までの長さ（つまり1歩）」で、現実の「およそ1メートル」に相当します。つまり1ステーは約25センチメートルです。

1シフ = 1 / 20ステー = 約1・25センチメートル

1ステー = 1 / 4ブージョ = 約25センチメートル

1ブージョ = 約1メートル

1ロウ（・ブージョ） = 20ブージョ = 約20メートル

1リ・ロウ（・ブージョ） = 400ブージョ = 約400メートル

1ダーリ = 4リ・ロウ = 約1600メートル

「おつと、悪いな。坊主、怪我しなかつたかい」「それが男の第一声だった。ずつしりとした低音は、苔生した大石を想起させる。

瞬間、ヨハンは自分の尻をしたたか打ちのめしてくれた石畳が、思いがけなく響いたいにも痛そうな音に驚く余り、つい口を開いているのを忘れて、謝り出しでもしたかと錯覚した。

もちろん、そんなはずがない。

第一、声は上から降つて来たのだ。もしも地面がある田突然宗旨替えをして、ペラペラ喋り出したとしても、その際には大地の声は下から聞こえてくることだろう。

見上げれば獣の顔を持つた巨漢である。隆々たる筋肉。豊かな体毛。前へと突き出た鼻に、結んだ口が一股の枝を逆さに引つくり返したような形の線を引いている。

男は明らかに猫類の特徴を備えていた。

(獣人だ。それも銀獅子の!)

ヨハンは思った。自分に話しかけてきたのはこの男に間違いない。一本足で立ち上がった獅子は、紋章として広く使われる意匠であるが、なるほど、迫力十分。太く力強い低音に見合った魁偉な容貌だった。

タテガミの頂点から足の裏まで、優に九スー（約225センチ）はあつた。

男の押し出しに、ヨハンは尻の痛みも忘れて、思わず見入ってしまった。

全体的に大きな体の主であるが、特に頭部などは殊更に大作りで、雪白のタテガミを含めれば、ヒューマンの三倍くらいありそうだ。動きやすそうな旅装束で、見るからに威力のありそうな大剣を担いでいる。一見して、いかにも手足れといった様子で、冒険者か傭

兵かといったところだらう。

「おい、どうしたね」

戸惑つたように獅子男は眉をひそめた。

自分にぶつかつた拍子に転んでしまって、そのまま石畳に尻餅をついている少年が、ぽかんと口を開いて無言でじっと見つめてくる。そんな姿に不安を抱いたのだった。

こいつはいけねえ。頭でも打つてぼうつとしているんじゃないなかろうな。実際には、ヨハンはただただ、見ほれていただけなのだが、そんなふうに勘違いをしたのだ。

「立てるか？」

肩から下げていたズダ袋を下ろすと、空いた片腕をヨハンへ向けて「つかまれ」と差し出した。

「ありがとう……でも、大丈夫、自分で立てるよ」

ヨハンは顔を赤らめながら、早口に男の手助けを辞退した。

そして、慌てて立ち上がる。転んだ際に捻つたらしく、右の手首が鈍く痛んで、小さく悲鳴が出そうになつたが、これも我慢する。男の気遣いには感謝したが、十四歳の少年らしい自負心が、それを素直に受け容れるのを許さなかつた。子供じみた虚勢だとは自分でも思うのだが、生まれついての性分だから仕方がない。それに、ぶつかつたくらいで無様に転んだ自分に腹を立ててもいた。

「おお、男だな、坊主」

獅子は言った。少年のやせ我慢を見透かした上で、それを好ましく感じていた。

「……それじゃあ」

男の言葉に含まれる、薄いからかいの成分を、敏感に嗅ぎとつたヨハンは、きまり悪い感情に追い立てられて、そそくせとその場を離れようとした。

「ああ、待て待て。そつ急ぐこともないだらう。じつしてぶつかつたのも何かの縁だ。道案内を頼めないだらうか。もちろん、急ぎの用があつたりしたら、そいつを優先してくれて構わないんだが。ど

うだらう

男が少年を呼び止める。腕を伸ばした拍子に、背に負つた盾と剣の鞘とがぶつかりあつてカチャリと鳴つた。いや、形容するならグアギヤリッだろうか。

ヨハンはびっくりして、まじまじと見つめた。あんなに大きな剣と盾とを同時に扱えるのだろうか。そうだとしたら凄まじい臂力だ。

「道案内？」

思わず鸚鵡返しに聞いていた。

「うむ。『巡る水車亭』という旅籠なんだが、知つているかい？」
言いながら、男はさきほど荷物を降ろしたはずみに緩んでしまった赤いマフラーを巻きなおす。

暖かそうな緋色の毛糸のかたまりが、白銀のタテガミと一緒に化して、もこもこと、なにやら妙な愛嬌がある。

「へつきし。しかし、どうにも、ここいらは寒くつていけねえ、アントナはそんな薄着で大丈夫なのかい」

「今年はまだ暖かい方ですよ」

大儀そうに凍をする毛玉に、ヨハンは少し毒氣を抜かれて、くすりと笑つた。

「そんなもんかねえ」

暖かい土地から来たらしい中年男は、今ひとつ納得のいかない様子で、ぶあつい手で大きな鼻を弄つていた。

ヨハンが思うに、もっと海に近い温暖な東部から訪れたのだろう。あるいは川向こうの西国の出身なのかもしれない。そこは、熱く乾いた土地だと聞いている。

「それで、話を戻すがな、旅籠だ旅籠。『水車亭』な」

「知つて……ます。途中までなら」

実際、知らない住人はいないだらう。この街で一番目に大きい宿屋だ。そして、ヨハンの目指す目的地と方向も大きくは違わない。

「助かる」

袋を抱えなおしながら、感謝の言葉を述べると、男はヨハンと隣

に並んで歩き出した。

「儂は『ディアロ』という。『ディアロ・エウインだ。坊主は何ていうんだ?』

ディアロと名乗る中年男のいかつい獅子面に、思いがけず人好きのする笑顔が乗っていた。

「ヨハン……です。ヨハン・クーケバッケル」

別に相手が名乗ったからといって応える義務もないのだが、その顔を見るうちに、いつのまにかヨハンも名乗り返していた。するりと人の懷に入り込んでくる笑顔がある。この時のディアロの笑顔がまさにそれであった。

『水車の街』 アイレンベルク。

アイレンベルク辺境伯領の主都である。王国の中でも比較的北方に位置するこの有力な辺境伯領は、古くから製糸、製粉、水運事業によつて栄ってきた川港の街である。

街の中央を貫いて流れるマリエッタ川（とその数多い支流）の恵みともいいくべき運河と、いたるところに設置された大小無数の街の異名の元になつた水車が存在することで知られている。

同時にこの辺りは北西部有数の穀倉・農業地帯もある。

近隣の莊園や自作農（地主）の元から運ばれてきた穀物を水力によって製粉する製粉場がいくつも存在している。

また亞麻の栽培も盛んであり、これもまた水車の力によつて糸へと紡ぎだされる。

そして水によつて作られた製品は、川船に載せられて下流の諸外国へと運ばれて行くのが通例であった。

まったく水によつて活かされた国である。

同時に北方に勢力をを持つメフテルと呼ばれる遊牧民がもたらす名馬や毛皮を、王国の中心部や、さらに遠く都市同盟まで輸送する交易の拠点であった。

一国・一地域から見た辺境とは、視線を少し引いて見れば、複数の地域を繋ぐ中心でもある。

古代帝国時代の防人の城砦に起源を持つとも言われる街並みは、南部・東部の都市が備えている柔らかな華やかさ、大らかな彩りとはまた違つて、抑えられた色調の端整かつ硬質な石造りである。いつそ無骨とも言いたであろうが、凛として良く整備されおり、都市の並々ならぬ力を感じさせる。

たとえば街中に敷き詰められた石畳。古代からの物を補修して使つてるのであるが、造られたばかりのように滑らかで、不恰好な割れや凹凸がほとんど見られない。

不斷の手入れが行われているのだ。

その石畳の上を、ヨハン少年の先導で獅子男ディアロが歩いている。

道すがら一人は話し合つた。

旅なれたディアロの話題は豊富で、なおかつ話し上手でもあつたので、彼の語る異国の話に少年はすっかり引きこまれ、ディアロの目指す『巡る水車亭』が建つ中央市街地に差し掛かる頃には、ヨハンはこの中年男のことが、旧知の親友に抱くのに負けないくらい、とても好きになつていた。

「へー、それで、ディアロさんは市庁舎を見に来たんだ。わざわざバルマから」

「正確には儂がじやなくて、相棒がだけどなー。オル……ああ、奴さんはオルランドってエルフなんだがな、芸術家氣質つてのかな、芸術家気取りかも知れねえが、まあ絵だの像だのが大好きでよ、突然『アイレンベルクの市議会所蔵のレオンハルトの絵を見物する算段がついた』のなんのとやかましく。儂はまあ……つきそいみたいなものだな」

運河を進む高瀬舟を眺めながら、ディアロは来訪の理由を説明した。

「つきそいなのに、その相棒さんと別行動なの？」

おかしなことだとヨハンは笑つた。

「んー。言われてみれば、たしかにおかしいなあ。おまけに、良い機会なんで、儂はのんびりとこの一本の足でせつせと歩いてきたんだが、そいつはさっさと馬車で行つちまつたからなあ。むむう、改めて考えたら、まったく友達甲斐のない奴だぜ」

憎まれ口を叩くと、わははつと豪快に笑つた。

大きく鐘が鳴っていた。

マリエッタの抱擁　　乙女の両の腕に護られた川中島の行政区から、風にのつて流れてくるのは午後一時を告げる時報である。

音源は市庁舎に付属する大鐘楼。

そこに収められた ザカリウスの装置　　最新の機械式時計である。

盤上の剣が一時を指すと同時に連動した鐘が打ち鳴らされる。

これは何年か前、領主伯爵が、遠く都市同盟から職人を招いて造らせた物であった。

驚くべきことに、この複雑怪奇な機構の一切が、いかなる魔術的な助けを受けることなく動いている。

「こんなものが出来た日には、僧院 の坊さまがたや、秘術師の先生がたは商売上がつたりつてもんだ」

当時、市民たちはそんな風に噂しあつたものだ。

それまで時間をはかる道具といえば、水時計や火時計くらいしかなかったところに登場した精密極まる異国の装置は、それくらいに衝撃であった。

もつとも、最大の衝撃はその値段だったという冗談とも本当ともつかない話も付属している。そんな笑い話があることからも分かるように、時計はアイレンベルクの富を象徴するものであり、実際的な面でも、正確な時間を知ることができるのは、商業の発展に寄与するとして、貿易に励む市民たちにはおおむね好評であった。

最後にもう一度、鐘の音は、ひときわ大きく鳴り響いた。

川面に波紋が広がるように、市内を満たした鐘の音が、そのまま
ゆっくりと石壁や石畳の中へ、しみ込むように消えていく。

その石畳の上を、ヨハンが走っていた。

「もうこんな時間！」

ヨハンは焦った。ついつい旅人の話に夢中になっている間に、気
付けば予定の刻限を大幅に過ぎてしまっていた。

そのディアロとは市街地に入つて最初の三叉路で別れたが、心配
はしていない、問題なく目指す『巡る水車亭』までたどりつけるだ
ろう。

今はそれよりも自分の心配だった。一時の鐘が鳴つた以上、昼の
休みもじきに終わりだ。急がないと午後の仕事に遅刻してしまう。
旦那さんは寛大な人だから、少しくらい遅れたところで笑つて許
してくれるだろうが、それに甘えるわけにはいかない。

普段ならば近所の人々と一緒に三言二言挨拶を交わしながら職場へと向
かうのだが、今日ばかりはそんな余裕は無さそうだった。

ヨハンは走つた。あんまりに全力で走つたものだから、奉公先の
『ダーヴィツ商会』に着いたときには、冬だというのに額に大粒
の汗がにじんでいた。

「どうしたんです、クーケバッケル君。そんなに急いで……ああ、
いや、時間的にはいつもよりもちょっと遅いくらいですが。いえ、
もちろん、遅れかけたから急いで走つてきたんでしょうとも。それ
は分かりますよ」

旦那さん。すなわち『ダーヴィツ商会』の会頭アーネスト・ダ
ーヴィツは温厚そうな丸顔に怪訝な表情を浮かべた。

団子鼻にちょこんと乗つた丸眼鏡の奥の緑色をした小さな瞳が、
いつもより大きくなっている。

「いえ……な……でも」

荒い息を整えながらどうにかそれだけ言う。しかし、ダーヴィツはそれでは納得しなかった。ヨハンが休憩時間の終了間際に駆け

込んでくるなんて実に珍しいことである。おまけに全力疾走の余韻に肩を激しく上下させている。

「そんな様子で、なんでもない、ということはないでしょ?」

質朴で仕立ての良い茶色い服に固太りの長躯を包んだヨハンの雇主は、困ったように微苦笑した。

基本的に温厚で面倒見の良い男だが、悪く言えばお節介、過干渉だということである。加えて好奇心が強かつた。無分別に根掘り葉掘り聞いてくるというわけでもないが、聞きたそうにうずうずしている。これは説明しないと納得しそうにない。

（まつたく、あれこれと知りたがるのは旦那さんの悪い癖だ。職業病だろうか……いや、単に物見高いだけだよな）

困った人だとヨハンなどは思つ。悪い人ではないのだが、むしろ非常に尊敬しているわけだが、そろそろ四十の声を聞こうという年齢の割には、妙に子供じみたところがある。

このまま放置しておいて変にすねられても仕事にならない。また別にじまかすようなことでもなかつたので、仕事の準備をしながら、ヨハンは旅人とのいきさつを語つた。

「母なる海、そして娘なる河川、わけても長姉たるマリエッタの大河よ」

こんな呼びかけにはじまる詩がある。マリエッタ川に取材した、とある無名詩人の手になる詩だ。出来そのものは凡庸な詩であるが、マリエッタ川のありさまを巧みに捉えたその内容から、アイレンベルクの住民には昔から広く愛されている。

その詩の中で、春の憂いにマリエッタの乙女が沈み、涙をあふれさせるばかりだと詩人は言つ。

融雪増水というものがある。遠くない将来、春が来て暖かくなると、冬の間に山に積つた雪が溶け出して来て、水量が増す。それを詠つたものだ。

今はまだ穏やかに流れるマリエッタ川の岸边では、人足風の男たちが多数働いていた。増水による氾濫に備えた堤の補修工事である。人足たちを手配したのは『ダーヴィッツ商会』だった。

商会はいわゆる 駆旋所 である。

周旋人や口入れ屋などとも呼ばれるが、依頼人と労働者との間に立つて仕事の仲介を行う業種だ。一般に冒険者への依頼斡旋業があるが、アイレンベルクでは、このように市議会の委託を受けて護岸工事の為の人足を手配することもしばしばあった。

「なるほど、順調に運んでいるようでなによりです。この分ですと予定よりも早く工事終了できそうですね」

現場監督の報告を受けて、ダーヴィッツは、眼鏡の奥の小さな瞳をいつそうに細めて笑うと、満足そうにうなずいた。会頭の後ろに秘書よろしく控えたヨハンが一人の会話の要点をメモしていく。実際に現場を指揮するのは、目の前に立つドワーフ族の現場監督だが、ダーヴィッツはこまめに現場を視察するようにしていた。

「ええ、今年は例年よりも雪が少なかつたおかげで工期が延びなくてすみそうですね……っと」

そんな監督の言葉を裏切るように、天から白いものが降つてくる。「おや、言っている間に雪が降つてきましたね」

「やれやれ、口は禍の門で奴ですか。ただまあ、この程度の雪ならば支障はありませんや……連中、むしろ身体を暖めようつていつもに動くかもしれないくらいだ」

肩をすくめる小人の冗談に、ダーヴィッツは軽く笑い返した。

晴れた日に風もなく降る雪を風花と言う。天空神系の祭礼で多用される、川流しの紙吹雪のように、小さな雪の粒が川に落ちる。粉雪だ。土手に焚かれた火が辺りを照らし、影法師をいくつも作る。

白い斑点が一瞬だけ浮かんでは、次々と流れに呑まれ、溶かされて消えていく水の面を眺めながら、ひとり言のようごダーヴィッツが呟いた。

「さて、そろそろ魚の美味しい頃ですかねえ」

茶鱈を初めとした、これから食卓を飾る淡水魚に想いを馳せる。

炒めても良いし、薰製もいい、蒸し焼きにするのも捨てがたい。

「そうそう、卵も忘れちゃあいけません。この時季に勝手に釣り糸を垂れると漁撈組合に叱られます。あれなんて、実に大きくて、食いであります……つと、残念、魚かと思いましたが、どうも違いますね。はて、火影でもないし」

最初、それは揺れ動く火の影が川面に投げかけられた物かと思われた。

だが、そうではなかった。魚影ではありえない大きな影が現れたかと思うと、一つ、三つ、六つと瞬く間に数を増していく。

川底で何かがうごめいていた。

にわかに不穏な空気が流れた。人足たちが騒ぎはじめる。ダーヴィッツが指示を出して、人足たちを川から離れさせようとした途端、川の中から奇怪な影が飛び出してきた。

「メロー？」

ヨハンは、そして人足の一部が同じ勘違いをした。彼らには、最初、それが、アイレンベルクの市内にも数多く住む水圏の民、人魚の一族かと思われたのだ。

けれども、その姿はメローと聞いて連想される形よりも、なお一層に不気味で、人間離れしていた。一言で形容すれば、一本足で立つ鱗の生えた蛙人間だらうか。背中には退化した羽めいた器官を備えている。

「いや、違う……けども、馬鹿な、サムヒギンだつて！」

ダーヴィッツが動搖も露わに叫んだ。彼の知識に合致するものがあつた。

サムヒギン・ア・ドゥール。アイレンベルクからは遙か遠くの大西洋の果て、深海底に棲まつとされる海の妖魔の一族だ。フーアやムーリヤルタツハなどと呼ばれることがある。

しかし、彼らが人類の文明圏、それも海から遠く離れた内陸部に

現れるなどと聞いたこともない。ダーヴィッツ自身、これが他人から聞いた話ならば「あり得ない」と断言し、一笑に付したことだろう。

唖然として一瞬対処が遅れた。

「旦那さん……！」

（おや、この叫び声はクーケバッケル君だな）

絶望的な悲鳴に我に返ったダーヴィッツが見たものは、自分へと向けて繰り出される大槍の、三叉に分かれた矛先だった。

（……あ、これは死んだかな？）

自分でも呆気ないほど何の感慨もなくそう思つた。覚悟を決める間もなく槍は自分を貫くだろう。残念ながら、痛いでは済みそうもない。

まるで他人事のように冷静に分析していた。

銀光が走つた。同時に鈍い音が轟いて、それから少し遅れて、落下した鎧鉄の看板が地面を叩いた時のような音が響いた。

ダーヴィッツは異音に身をすくませて、自分に気づいた。

自分？ 音に戦慄き、死に恐怖している自分。死に刈り取られるはずだつた意識。だというのに……生きている！

死はやつてこなかつた。突如身近に迫つた死の影は、また唐突に遠ざかつた。

死への恐怖よりも突然の大音響にびっくりして、思わず閉ざしてしまつっていた眼をダーヴィッツが開くと、視界に大剣を抜き放つた銀毛の獅子がいた。足下には妖魔の屍骸が半ば両断されて横たわり、少し離れた場所には槍の残骸が落ちている。

獣人が手にした大剣で力任せに弾き飛ばしたのだろう、槍は柄の部分から捻じ曲がつていた。

「……助かつたのですか……どなたかは存じませんが、感謝を」

混乱するのは後である。湧き上がつてくる諸々の疑問を意志の力で捻じ伏せると、ダーヴィッツは事態の把握に努めた。

川の中から突如出現した妖魔の軍勢……とまではいかないが、一

匹や一匹ではきかない数の、本来は海に属する怪物に、これまた唐突に現れた獣人の戦士。それに庇われて立っている自分とヨハンと監督を、少し離れて人足たちが取り巻いている。

実際、よく分からぬ状況だった。

まず、この銀色の獣人が自分を助けてくれたのは間違いないだろう。加えるに、男が妖魔の群れを牽制してくれているおかげで、ヨハンや人足たちへの被害もまだないようだ。また、混乱して大惨事を引き起こしていてもおかしくない人足たちが、武人の気迫に呑まれているのも幸いであった。

この危うい均衡が崩れる前に、彼らを早く避難させなければなるまい。

「見ず知らずの戦士一人に盾役を押し付けることになりますが、今は彼に頼るしかありません。監督、クーケバッケル君。我々は人足の皆さんを連れて避難しなければ……クーケバッケル君？」

二人に声をかけようとして、ダーヴィッツはヨハンの様子がおかしいことに気付いた。

「ディアロさん！」

ヨハンが叫んだ。救いの神こそ誰であろう、少年が、昼間出逢ったディアロだったのだ。

「うん……おー、ヨハンかー。奇遇だな！」

ちょっととした買物先で知り合いに出会つたような気楽さで、ディアロはヨハンに笑いかけた。声からは無数の怪物と対峙しているといつた緊張感はまるで感じられない。しかし、けして侮り、油断しているわけではないことが素人目にも判つた。突破しようとする妖魔が現れるたびにそれを牽制……を通り越した痛手を与えて退かせる。

「がつはつは。こりゃあ、見苦しいところは見せられねーなあ」

獅子は吠えるように笑つた。それから、ちょっとと顔を引き締めると、ダーヴィッツに要請する。

「アンタが責任者だな。避難までの時間は稼ぐんで、慌てて転ばな

い程度に急いでくれ

願つてもない申し出だつた。ダーヴィッツは速やかに肯いた。

「お礼は後ほど……貴方もあまり無茶はされませんように。聞いての通りです、皆さん、我々は後退しますよ！」

人足たちはそれによく応えた。先頭にたつて誘導した現場監督の手腕もあるが、地域の顔役であるダーヴィッツが、彼らに信頼されていたのが大きかつただろう。目立つた混乱もなく、堤防からかなり離れた所まであらかた避難を済ませた。

「貴方も早くお逃げください！」

身を挺して自分たちを逃がしてくれた戦士の方へと向き直り、ダーヴィッツは大声で呼びかけた。そして、信じがたいものを目撃した。

「……え？」

目を疑つた。

人足やダーヴィッツたちという足枷が無くなつた瞬間。「足手まといが居なくなつたから、ようやくこれで本氣が出せる」とでもいうのか、獅子の戦い方が変わつた。

それまでの防御主体の戦い方から それでも随分と攻撃的な「攻撃は最大の防御」という古式ゆかしき金言を実践する戦い方であつたのだが、ことここにいたつては、もはや防御する気があるとは傍目にも思えない、熱狂的な戦いぶりだつた。

それでいて、無茶苦茶な戦い、無分別な蛮勇が持つ見苦しさ、泥臭さを感じさせないのは、男の剣腕が卓絶した物であることを無言の内に主張していた。

剛力に任せて振るわれた大振りの一撃で、数匹が纏めて薙ぎ払われる。

もちろん、いかに男が肉体的に恵まれた獣人とはいえ、腕力だけではこうはいかない。引くべきは引き、押すべきは押す。足を捌き、体を捌き、要所要所に巧みなフェイントを織り交ぜ、力を効果的に使つてゐるからこそだ。

縦横に大剣が振るわれる。緩急自在の攻また攻。鈍い金属光が閃くたびに妖魔が倒れる。鉈で枝を払うようだ。

獅子は吠えた。

戦場を支配する威武の叫び。音高く激しい剣戟の響きさえもそれに譲つた。元より岩のような巨漢である。それがさらに一回りも三回りも大きくなつたように思われた。

とてつもない迫力である。大きく離れた場所に立つダーヴィッシュたち守られている者ですら、思わず威圧され、震えたのだ。敵として直面する者の恐怖はどれほどであつただろうか。恐るべき強敵の出現に、妖魔の群れがざわめいた。

ディアロは眼をぎらぎらと輝かせ、敵を睨みつけ、歯をむいて笑つた。

思わずあどじさつた海魔の兵团 もう随分と数を減らしていたが、その中の一匹に狙いを定めると、突風のように走つた。

戦場の混乱をも断ち割る勢いで、ぶつんと風を斬つて剣が振りぬかれた。

速く、鋭く、そして高く！

青光一閃 疾風迅雷。

光焰乱舞 銀獅子吼。

斬り、打ち、突いた。暗い血が戦場の空を舞つた。瞬く間に妖魔の群れが蹴散らされていく。

だが、ふと、ある所でディアロが顔をしかめた。「しまった！」と今にも叫びそうな表情であつた。あるいは、あまりにも軽快に蹴散らせる物だから、戦士は調子に乗りすぎたのかもしれない。一匹の妖魔を吹き飛ばしたが、勢いあまつて剣先が高く跳ね上がりすぎたようになされた。

それを好機と見たのか海妖が秀逸な連携を見せた。まばたきほどの間隔を入れて、左右から連續して槍を繰り出した。

しかし、ディアロ・エウインはやはり熟達の戦士だった。にやりと笑う。双方から突き出された槍を 隙と見えたものこそ誘い

だつたのだ 片方は返しの刃で切り払い、もう一方は大盾で受け止める

まともに入れば岩をも打ち貫いたであろう、奇怪な魔力によって招かれた水流を纏つた一撃であった。それを軽く受け止めて小搖るぎもしない。

どころか半歩前に踏み込みながら、盾をグッと突き出して相手の体勢を崩し、盾の側面に打ち付けられた補強用の縁金具で頭蓋を叩き割りさえする。

その不快な、しかし畜性を刺激して止まぬ感触に、いつそう高く銀獅子は吠えた。

もはや大勢は決していた。

ついに、ひときわ高い断末魔の悲鳴が上がった。

ディアロの振り下ろした剣が、最後の水妖を斬り伏せたのだった。

戦闘の終結を見届けて、ダーヴィッツは知らず知らず肺の奥に溜め込んでいた息を、ようやくのことで吐き出すことが出来た。そして、ふいに、こことは別の場所にも上陸した妖魔たちが存在する事に気付いた。

街のあちら一ひちらで戦闘を行つ音が聞こえてくる。

獅子と少年（後書き）

2011・09・08（木）

ディアロがやつてきた街を「パツフェルベル」から「パルマ」に変更。

解説

元々、とあるTRPG（およびWEBゲーム。『パツフェルベルの鐘』）の一次創作として書き始めた物でした。

その時、拠点となっていた街が「パツフェルベル」でした。

その後、書いていくうちに妄想が膨らみ、「独自の世界にキャラ

クタとストーリーラインだけ移して書き直そう」と思い立ちました。

その際、（一応理由があつて）都市の名前も「パツフェルベル」から「パルマ」に変更していたのですが、それを反映し忘れていました。

ちなみに、ディアロは仲間のPCで、相棒として言及されるオルランドが筆者のPCでした。

飛来した矢に胴を射貫かれた馬が断末魔のいななきを上げた。

駆け足の名残で数歩を進んだところで、ぐずりと崩れる。

液状の身体を持つ怪馬であつた。赤い血の代わりに、ちょうど翡翠と緑青の間の色をした水が飛び散り、はらわたの代わりに、茶色い砂利めいた質感の巻貝と淡水性の川藻の緑どが撒き散らされる。散乱する馬の残骸が、宿の軒に吊るされた螢火燈の淡い光に照らされて仄白く光る石畳を汚した。

水棲馬だったのだ。

「ケルピー……とはな。奇妙を通り越して、もはや異常だな」
いつでも撃てるよう一の矢を継いだ体勢で、宿のバルコニーに立ちながら、オルランドはどこか呆れを含む表情を浮かべた。

先ほどまで眠っていたのだろう、寝乱れ髪に、物を射るのに適しているとは言いがたい、ゆつたりとした寝巻き姿である。

街を徘徊する奇妙な気配を察して飛び起きたのである　と行けば、勢い神秘的な感じがしたのだが、なんのことではない、実際は夜中に尿意を覚えて起きだしたところに、馬匹のいななきと馬蹄の轟きを聞いたのだった。

「はて、こんな夜中に街中を駆ける馬とは、急を知らせる早馬か何かか」

野次馬根性を出してバルコニーに出たところで、石畳を駆け回るケルピーと出くわした。妖精族の男はぎょっとした。水辺に棲み、たわむれに人を水中に引きずりこんでは内臓を食い散らかし、時々人の死を預言するという恐るべき幻獣である。泣き女バンシーや愚か火などと同じく、沼沢河川に親しみ、水辺を代表する妖怪として知られている。それまで幾らか残っていた眠気が一気に飛び去った。前後の状況は不明であったが、どう考へても人里にいてよい種の獣ではない。

「否。いかにあの妖馬が早瀬に現れる存在だとはいえ、そしてこの都市が川の街だとしても、人里に現れるはずがない」

夕刻のサムヒギン騒動に続き、今度は街中を徘徊するケルピーである。所属する場所を比べれば（一方は海水の属であり、もう一方は淡水の属である）、少し近づいたと言えなくもないだろうが、それにしたところで普通は街中に出るものではない。それが現れたのだから、明らかな異常事態であつただろう。

我が事ながら乱暴だとは思つたが、怪我人や死亡者がいる前に仕留めておいた方が無難である。

そして、速やかに射抜いた。

「この分では、次あたり悪霊や幽鬼の類でも出かねんが。こいつは百鬼夜行の先触れか、はたまた仙境か魔界と道が交差しでもしたか」いつでも一の矢を放てる体勢を保つたまま独りごちる。

「そういえば、この街に入つて最初に道が分かれる所は大きな三叉路だつたが、さてはそこから入り込んだか？」

南大門を入つて最初の三叉路を越えて、真っ直ぐに街路を突き進めば、ちょうどこの宿につきあたる。

もちろん普通の旅人や商人を当て込んでの物であるが、怪物にとつても突き進むのに良い立地であったと言う事なのだろう。

岐路　すなわち道が分かれ、また同時に交差する所には人と物の流れが集まり、たまる。それは魔術的な意味でも同じくある。人が岐路に立つように、精魔は岐路に舞い踊るのだ。

そのような場所には、『善き淀み』たれという願いを籠めて、道祖神として 水の精霊 の祠堂が建てられるのが通例であった。考える間に数分が経過した。片目を閉じ、唇を舌で湿らせる。風の吹く音が聞こえるばかりだった。

じつと、崩れ落ちた水の妖馬の残骸を見下ろしていたオルランドであつたが、もはや動きだす気配はないと判断して、すっと構えを解いた。結局放たれることのなかつた二の矢を 施した威力強化の呪いも解いた上で 矢筒に戻し、弓を下ろす。

「なんにせよ、このまま放置しておくわけにもいくまい」
放つておいてもどのみち発見はされるだろう。夜警が訪れるのが先か、それとも朝になつて宿の人間が発見するのが先かはわからな
いが。

とはいへ、残骸から水棲馬を推測できるかは疑問である。
現場に残るのは、水と泥と戻と川藻に汚された一本の矢。そこだけを見れば実に不可解である。

しかし、理由はわからなくとも矢と自分を結びつけるのは容易で
あろうと思われた。なんとなれば、宿の真ん前の街路に矢が突き立
ち、当の宿屋には弓矢を持つた余所者が宿泊しているのだ。

男は自分の事を善良な市民だと考えているので、その時になつて、
色々と勘ぐられるのは、想像するだに気分が良くない。

要らぬ誤解を避けるためにも、まずは宿の人間に事情を説明し、
なるべく早く市庁舎か、あるいは都市衛兵の詰所か、しかるべき当
局に報告するべきだう。

そう判断すると、寝間着から外出着に手早く着替え、さらにその
上から武具を帯びる。

戦闘用の丈夫な革服を着込み、籠手をはめ、大小二振りの剣
エルフの非力でも扱える小剣と受け流し用の短剣を佩く。少し考え
て弓矢は置いていくことにした。高所から射るならばともかく、街
中で弓は使いにくい。

夜中とは言えわざわざ武装して街に繰り出すなど、普段なら考え
られない話だが、今は普通の状況にあるとは言えない気がした。

「まったくもつて難儀な事よ」

準備万端整えて、かすかに苛立ちをこめてヒゲをさすつた。あま
り愉快でない事態にならないと良いのだが。

「ああ、それに便所にも行かなければならないな」

そしていささか間の抜けた声で呟いた。

少し緊張が解けたのだろう。すっかり忘れていた尿意をいまさら
に思い出していた。

さながら話に聞く水底の寺院の趣きだと思われた。

淡い月明かりに照らされる街並みは、強く莊厳な印象を与えた。そして夜霧は流れる波のようだった。

静かだ。妖魔騒ぎの影響もあるのだろうが、昼間の陽気な喧騒が、遠い異国のことのように思われる。

なによりも水の世界を思わせるのは、魚たちの奇妙な振る舞いだつた。

瓜類の皮の網田のように街中を走る水路から、ふわりと空中へ無数の魚が飛び出し、そのまま霧の中へと泳ぎだしたのだ。

薄い月の光を受けてきらきらと鱗が光るさまは、夜行性の蝶にも見えた。

「もしくは森の妖精^{ホトトギス・ドラゴン}竜か。しかし、魚が空を飛ぶなどとは……いよいよもつて奇天烈な。南の海には水中を泳ぐ靈鳥^{リョウジョウ}がいると聞くが、それはもしやこのようなものであろうか」

船乗りたちから聞いた眉唾物の　なにせ、鳥が海中を泳ぐとい

うのだから、馬鹿馬鹿しいにも程がある噂話が思い出された。

そのうちに、ふとオルランドは気づいた。先刻よりもさらに魚の数が増えている。

それもこんな北国の川に棲んでいるはずがない色鮮やかな種類の魚たちまで泳いでいた。

頭上や肩の辺りを泳いでいく魚を田で追つていると、まるで自分がメローにでもなった気分だった。もっとも魚たちがそうするように、宙を泳ぐ事まではできなかつたが。

異常極まりない状況であるということをさえ考えなければ、詩人が譚るイスの都を巡る一連の歌物語のような幻想的な美しさであつ

た。

オルランドは四方を見回し、最後に頭上を見上げた。そちらにひときわ巨大な気配を感じたのだ。

そして絶句した。

「勇魚クジラだと……！」

海竜にも擬せられる、黒々としてなめらかな皮膚を備えた、小山のような体躯を誇る、偉大なる魚の王だった。

「それに海蛇のたぐいに幻影を吐く巨大貝の化物、そしてあの平べつたいのは確かエイとかいう怪魚の一種だつたな」

以前に図鑑で読んだ怪物だ。挿絵として添えられていた細密画が非常に見事な物であったので、それで特に記憶に残っていた。

この期に及んでは、流石に薄ら寒くなってきた。このまま進んで行きつく先には、果たしてどれほどの事態が立ち現れるのだろうか。クラーケンやら、それこそ本物の海竜やらが待つていないと限らない。

あるいはそれ以上の驚異か。

エルフは少しだけ後悔を覚えはじめていた。持ち主の落ち込んだ氣分を反映して、細長い耳がかくつと下へと伏せられる。

自分がこの事態を收拾できるなどとは元より思つていなかつたが（するつもりもない）、衛兵に報せたところにどうにかなるとも思えなかつた。

衛兵の詰め所になど向かおうとせず、もつと言えば夜中に起きだしなどしなければこんな奇妙な事態に巻き込まれずに より正しくは、気付かないで済んだのではないかと思われたのだ。

だが、すぐに首を振つた。知らぬ間に後ろから鮫に食いつかれるよりは遙かにマシだ。

そんな風に考え事をしていたので、気付くのが遅れたのだろう。気づけば街のあちらこちらからの物陰といつ物陰から、害意に満ちた視線を感じる。

迂闊だった。

オルランドは内心で盛大な舌打ちをした。いつのまにやら怪物の群れに取り囮まれている。

何匹……いや、何百匹だ。それは数えるのも馬鹿らしいほどの數だった。絶望的と言つていい。「冗談でも、全てを斬り捨ててやる、耐え切つてやるぞ」と豪語する気にはとてもなれない。

怪物たちは明確な殺意を示していた。このままでは死は免れまい。武術の心得こそ有つたが、相棒のディアロと異なり、オルランドは生糞の戦士ではなかつたし、死生の境にふらふらと片足で立つて喜ぶたぐいの醉狂者でもなかつた。

血の氣は失せ、膝から力が失われて、崩れ落ちそうになる。恐ろしかつた。

だが、ここで倒れていても仕方がない。己を叱咤して、どうにか生き延びる方策を考える。

方策といつても何か起死回生の秘策をおいそれと考え付くようなものでもない。どうにかして振り切つて、建物の中へ逃げ込むくらいしか思いつかない。

ならば、どこが相応しいか。隙を見せぬよう慎重に歩きながら考える。

(素直に当初の予定通り衛兵の詰所へと向かうべきか……いや、それはまだ、大分距離があるし、それにそぢらへ続く道には化物どもの気配が濃厚だ)

かと言つて宿に逃げ帰るにも進み過ぎた。宿自体、構造的に籠城に適した建物ではなかつた。

(「いわなれば駄田で元々、このよつたな怪異には精靈に縛るのが一番だ」)

数日前からこの街に滞在しているので、ある程度の地理は分かっている。

精靈の園生。 精靈 を祀る社へと向かつことに決めた。この街に加護を与える祭神は 水の精靈 である。

そうと決まれば時間が惜しい。それに、ぐずぐずしていれば恐怖が募るばかりで、動き出せなくなりそうだつた。

覚悟を決める。呪句を唱え、靴の呪力を解放する。

息を整える為に大きく深呼吸をすると、オルランドは剣を抜放ち、^{とき}鬨を発して考えられる限りに最短の道へと向かつて駆け出した。

逃走劇が始まった。

激しく剣が振るわれて、怪物の爪牙がそれを受けとめる。

剣戟の音。

逃げ走る靴音とそれを追う者たちの足音。

逃亡者には石畳を走る他に道がなかつたのに、追つ怪物たちは自在に空中を泳ぎまわっていた。

けれど、それを理不尽だと感じる暇もなかつた。

頭上から降つて来た一撃を、からくも転がつて回避する。転がりながら、周囲一帯の足を払う。咄嗟に化け物が宙へと飛び逃れ、オルランドはその隙間へ強引に自分を押し込むと、前転の勢いを殺さぬよう飛び起き、走った。

元より倒そうという意思はない。男が考えていたのは牽制程度に攻撃し、怯ませた隙にそこを全力で突破することだけであった。

だといふのに、生来の俊足に加えて、歩みを速める妖精族の靴の力で加速された、速さにおいて比類ないこのヒルフが、本気で逃走を試みて、それが叶わない。

やはり、無謀な試みだったかと心が挫けそうになつた時、ふとエルフの長耳に、美しい歌声が聞こえてきた。

どこまでも美しく澄んだ、清水に満たされた硝子の水差しを、ポンッと弾いたような声だった。

どこか子守唄を思わせる歌声は、よくよく聴くと 精霊 を称える祝詞であった。

そして、祈りの聖句が近づく程に、怪物たちの攻撃が弱まっていく。

「しめた！」

オルランドは全靈をこめて声の方へと駆け出した。エルフの一族の長い歴史の中でも、これほどの勢いで走った者はそんなには存在しないだろうという凄まじい逃げ足であった。

そして、いくらも経たないうちに、田舎の一団と行き当たった。それは僧団であった。そしてまた軍団であり、演団であり、楽団であった。

ひとりわがらかに歌う尼僧を中心にして、高度に装飾的な楽器を兼ねる儀礼用の刀杖槍旗を携えて舞い踊る、六人の僧兵に護られて、ゆつたりとした僧衣を纏う水神の僧衆が、聖句を唱えながら、左手に持った水盆から、右手指に聖水をつけ、それを振りまきつつ歩いて来る。

歌がやみ、怪物の群れは去つた。

「夜の終わり、朝の始まり。あした絹の糸の羽を持つ、時告げの鳥が高く鳴く。目覚めは近く、夢見の時間は終わりです」

祈りを終えた水霊の王の尼僧は、法悦の忘我から未だ帰らぬ様子で、誰に言つともなく呟いた。

それは小さな囁き声であつたが、聞く者の耳を、奇妙に刺激する不思議な響きを持っていた。

首筋を女の柔らかな手で撫でられたような気分だった。

その性質　　声質は確かに聖だらう。

だが、聖歌の余韻にひたる熱っぽく恍惚とした口調には、無垢よりは艶冶という形容がより相応しい。

それ自体が歌の続きのようで、まるでシーラナに魅入られたようだとオルランドは思った。

声麗しいメロードの中でも、『べ一部の限られた者のみが備える呼び声である。

不快ではないが、無闇と昂揚させられるよつて、男が居心地の悪い思いをしていると、ふいに尼僧がエルフの方を向いた。

ようやく　神の国　から魂が戻ってきたようであった。

立ち往生を思わせる微癪攀を伴つた硬直が解かれ、ぼうつとして虚ろな闇の深淵を覗かせるばかりであつた尼僧の瞳に、力強い水色の光が灯つた。

「もし、そこのお方。一人の夜歩きは危険ですよ。もし夜盗と出くわせばどうします。明け方に近いとはいえ、このよつな刻限にどうされましたか、散歩にはいまだ早いかと思われますが」

そして、一、二度僧衣のひだを整え、裳裾の乱れを直しながら、僧団に混じり周囲を警戒する見慣れぬエルフに向かつて、そんなとぼけたことを聞いた。

聞かれたオルランドが呆れたことに、どうも本氣で言つてゐるらしく、はぐらかしている風でもない。

鈴音を思わず声の美しさに変わりはないが、そうたずねる声からは、先ほどの熱狂の名残は欠片ほども見出せなかつた。

夜の夢

「夢ですか。アビゲイル司祭、貴女はこれが夢だとおっしゃる
「その通りです」

驚きを含んだオルランドの問いを、精靈に仕える尼僧はあつさりとした口調で肯定した。

魚鱗を思わせる光沢を放つしつとりとした水色の髪、藍瓶あいがめを覗いたような魅力的な水色の瞳、中でも一際目を引くのは、異種族ならば耳にあたる箇所から生えた、ひれを思わせる装飾的な突起だった。それら一群の、種族に特有の形質から明らかなのに、魚の類の特徴を備えた水の妖精メローの一族である。

彼女は自らを クリコ水霊院 の詠唱師アビゲイルであると名乗つた。

アビゲイル・イリイーシナ・ポラースカヤ女司祭。

「それは、つまり、我輩は実は眠つていて、貴女がたは夢の中の登場人物であると?」

戸惑つたようにオルランドは重ねて問い合わせた。

それでは、自分は今でも宿の寝台の上で、温かい布団にくるまつているとでも言うのだろうか。こんなにも朝まだきの冷たい風を、総身に感じているというのに。

「あるいは、あなたが私の夢の中の登場人物であるやも

そう切り返されてオルランドは一瞬鼻白んだように言葉に詰まつたが、すぐに水色の女司祭の目に宿るからかいの色に気付いて、苦笑いを浮かべた。

「い」[冗談を、司祭殿】

「あー、今のは確かに[冗談ですが、夢だところのは[冗談ではありますよ】

すべて、本当の話です、と司祭は笑った。

「なるほど。よしんば、[冗談ではなく、真実、夢であつたとしてももちろん、貴女のような美人と『一緒にできるのは、夢の中でのこと』とは『え愉しいし、夢に見ていただけるならば男として光栄ですが、このような夢を見る理由が思いつかない』

言しながら、オルランドは、苦笑の色を深めた。
自分がまるで聞き分けのない子供にでもなつたような気がしたのだ。

「お上手ですね」

世辞と取つたようだが、その割りに嬉しそうに司祭は微笑んだ。

「ですが、これはやつぱり夢なのです」

穏やかに、しかりきつぱりと冗僧は言った。

「けれども、オルランドさんが誤解されているような、あなたや私が見た夢でもありません。人の夢にこのような力はありません。夢見ておられるのは 精霊 あるいは 悪魔 どちらであるのか判りませんので仮に 精霊 と呼びましょう」

そこで一度言葉を切り、指で聖印を結んだ。

「ええ、そうです、私たちは現実に存在する人の類です。ですが、同時に、その方の見る 夢 の中の登場人物でもあるのです。いえ、より正しくは背景でしょ「つか」

「背景？」

「路上のけだら居で、蟻や草に注目する」とはあまりないでしょう？

それだけの隔絶が存在するとアビゲイルは考へていた。

同時に、だからこそ、いつもして自分たちは自由に動けているのだ んうとも。

「今現在、このアイレンベルクという都市そのものが、その方の夢 と一体化しているのです。と言つても、実は私も完璧に理解しているわけではないのですけれども……ああっ、そんな胡散臭そうな目をなさらず。それは、私も不思議には思います、ですが、常識ではかれる事態ではありませんし、悪夢のよつであると思われませんか？」

最後の一言は、まるで論理的な意見ではないが、それがかえつて奇妙な説得力を生んでいた。

「ふむ」

オルランデはしづらべの間思案した。怪物の群れが消え去った以上、もう差し迫つた危険はない。

納得できたわけではないが、ひとまず最後まで聞いて、それからゆっくりと考えれば良いだらう。

最早、頭から否定する気はなくなつていた。

「悪夢のよつだとは思こますが、悪夢そのものだとは思えませんな

「ええ、夢ではありませんからね、巻き込まれる私たちにとっては、どこまでも現実です。あくまでも、夢見ているのは 精魔 であり、その方が見られた 夢 が、現実に影響を与えていいるのですから。一部の先鋭的な神学では、この世の全ての事象は、宇宙の中心に坐す 造物主 が、まどろみの中、夢見たことの投影に過ぎないと主張されますが、それは極論であるとしても、ゆえなきことではあります。

神々は世界を書き換える力を有している。

「それが 神 ならぬ 精靈 ないし、かつての権能の残照を
幾ばくか残す 悪魔 であるとしても、方々の掌る 規範 ありき
で 物質 があり、また 物質 が移ろいやすいものである以上、
物質 から成るこの世界はその影響を免れえません」

「いまいち、その種の思索には疎いもので、理解の及ばぬところが
あります。が、人ではないものの 夢 が人の現実に影響を与えるこ
とがあるというわけですな。伝承上の『華胥国』や『幻夢郷』のよ
うなものか。そして、その 精魔 が怪物を……いや、実際の数と
しては、怪物よりも魚の方が多かつたか、さしづめ、その怪物や魚
を含めた 海 を夢見たというところですか」

「正確には、河川や沼沢を含めた水界全般のようですがね」

オルランドの眩きに、アビゲイルが多少の訂正を入れた。それは
大筋での肯定を意味していた。

「ああ、なるほど。そういうえば、我輩が最初にお田にかかったのは
淡水性のケルピーであった。言つなれば、水底の夢ということになりますか」

オルランドは田をみはつた。色々とあって、すっかり忘れていた

が、その通りだ。確かに海だけではないらしい。

「言ひえて妙ですね。結局のところ、水であることは変わりなく、海と川は繋がっていますからね。女王にいたっては、霧雨の水滴や地下水をも含めた水と言いつ水を支配される御方ですし」

そこまで行かなくても、高位の精魔の視座に立てば、海と川の違いなどあるまい。

「先ほども言いましたように、果たしてこの方がどなたであるのか、までは解かりません。感触としては水の根源に近い方、我らが女王の偉大な眷属か、かつてそうであつた大悪魔であるかとは思うのですが、残念なことに、私どもクリコの院の記録に、該当する精靈 悪魔はおられませんので。ただ、一つ言えるのは、善き方ではありませんが、けつして悪しき方でもないということです。善惡などではなく、もつと根源的かつ原始的な衝動に律されたお方です」

「では、悪意を持つて怪物を振りまいているのではないと?」

「はい。その方は本当に、ただ夢を見ておられるだけなのです。かといって、そのまま放置しておくわけにもいきませんし。せめて、より深みへとその眠りを誘い、夢の活性化をしづめようと、こづして夜毎、子守唄をうたつて回っているのです」

では、最初に感じた子守唄という印象は、間違いではなかつたわけだ。

「では、今日はひとまず、完全に眠りについたわけですね。怪物が消えたのはそういうことなのだろうと考えた。だが、アビゲイルは、それを否定する仕草を行つた。

「いいえ、いいえ。私どもに、そこまでの力はありません。そつと

機嫌を損ねないよう干渉し、夢見の頻度を下げる程度です。

ただ夜明けが近づいて、夢を見る事をやめられただけなのです。

人だってそうでしょう、普通、夢は夜に見るものです

「いや、しかし、それでは、脇に落ちないことが一つあります」

なるほど、と納得しかけたが、それだとおかしなことが出てくる。

「わかります。オルランドさんが言われるのは、昨日の夕方に現れたサムヒギンたちのことですね。あれはとても奇妙なことです。まるで道理に合いません。私たちは危惧しています。それに向者かの作為を感じずにはいられません」

「ここので少し時計の針を戻そう。

オルランドが尼僧アビゲイルと出会った払暁を起点に、ちょうど
短剣一周分、十一時間ほど前の話だ。

ディアロ・エウインが海魔サムヒギンの群れを蹴散らした頃である。

怪物が出没する直前に降りはじめた雪が、少しづつ勢いを強めて、
うつすらと積もり始めていた。

危機を脱し、ほっと息を吐いたダーヴィッツは、しかし、すぐに
また、はっと息を呑んだ。

遠くから、近くから、街のあちらこちらから、剣戟の響きと怒鳴
りあう声とが聞こえてきたのだ。

「田那さん」

ヨハンが緊張に蒼褪めた表情で言った。

ドワーフの監督や人足たちも一様に固い顔付である。
空気が強張っていた。

逃げる中でずれた眼鏡を直しながら、ダーヴィッツは、不穏な音
の聞こえる方へと顔を向けた。

見える範囲では何ら異常は無かつた。常と変わらぬ街並みが広が
っている。

けれど、それが一層、想像を劍呑な方向へと急き立てた。
苦い物がこみ上げてくる。鎌を呑んだような不快感。
これはやはり……。

「どうやら化け物どもが現れたのは、ここだけじゃ あないらしいな」

急ぎ足に近づいて来たディアロが、ダーヴィッシュらに声をかけた。

一同、思わずひるんだ。

だが、それも無理はない。

近くで見ると改めて気づくが、この人獅子はやはり並外れた大男である。

人里に現われる事も稀な熊人や巨人族を別にすれば、ディアロのような大型の猫類の獣人は、最大の種族の一つであるが、その中でも頭一つ抜けているだろう。

この中では一番目に長身であるダー・ヴィッシュなども、ヒューマンとしては背の高い方なのだが、なおニースー（約50センチ）は縦に長い。横にいたっては倍以上だ。

それに、ヨハンなどは瞬間の出会いからディアロに好印象を持っているが、他の者からしたら、恩人だとは分かっていても、何処の誰とも知れない相手だというのもある。

それが、犠牲者の体液を未だ滴らせる抜き身を手に、表情こそ柔和な物であったが、返り血に染まって、ところどころ赤と銀の斑になつたタテガミをなびかせ近づいてくれば、動搖しない方がおかしい。

遙まきながら、ディアロもそれに気づいた。

（あー。まあ、あれだな。想像するに、竜蛇の手合に囲まれて絶体絶命と覚悟した所へ乱入してきた霜の巨人が、そいつらを斬り殺した山刀片手にニヤニヤ笑つて近づいてきたってな所か。スケール的に。おう。そいつは儂だつて怖いな）

苦笑すると、懐から取り出した布で剣身をざつと拭い、無造作に鞘に収めた。

肉厚で、柄の長い片手半剣であった。

もつとも、本人は軽々と片手で扱っているが、ヒューマンやドワーフの筋力と体格では、長大な両手剣として扱われる もしかしたら、大きすぎて剣として扱えないかもしれない だろ？

「どりにも締まらねえな、こりや」

肩に手をやつて首をほぐしながら、がははっと笑う。

「……で、アンタら、ちょっと尋ねるが、助けてよかつたんだよな？ いや、なんとなく勢いで助けに入っちゃったわけだが」

軽くおどけた調子で聞く。

身も蓋もない事を言えば、怪物に対する偏見で助けたようなものである。

助けた中に昼間知り合ったヨハンがいたのも結果であって、銛の前に割つて入るまでは、『ディアロにはサムヒギンと戦つ理由は何もなかつたのだ。

もちろん、命を救われて困る者は基本的には存在しない。

ダーヴィッシュもヨハンも人足たちも、それについては、とても感謝していた。

「もちろんです。助かりました、ディアロさん」

やはり、最初に口を開いたのはヨハンだった。人足たちも口々に礼を言づ。

ダーヴィッシュも、軽く頷くことで同意を示すと、音の出所を考えることは一旦止めて、救援に対する謝意を述べた。

「ええと、ディアロさんでしたか。危うい所を助けていただき、ど

うもありがとうございます』

「なに、気にしない。たまたま居合わせた儂が、好き放題に暴れまわっただけのこと」

礼を言われた当人は、のほほんと返した。

そして、辺りを憚るように声をひそめると、内緒事を打ち明けるよつて。

「実は調子に乗つて連中を全員叩ききつちまつてから、『待てよ。避難訓練に雇われた怪物役の役者だつたらどうしよう』ってなもんで、内心でドキドキしてたところですよ」

そんなことを小声で、ただし皆に十分に聞こえる大きさで言った。無論、この辺は冗句であるよつ。

怖いものとて無さそうな、見るからに肝の太い大男が、そんなことをじごく真面目くさい顔をして言つものだから、みんな思わず笑つてしまつた。

緊張で身も心も強張つていた反動だろう。その場はどうと大笑いの渦に巻き込まれた。

明らかに場の空気が変わつた。

厳めしい顔に反して存外茶目つ氣がある。

ダーヴィツツも笑つた。

むしろ、率先して大きな声で笑いながら内心で舌を捲いていた。

(よく人心掌握の術を弁えてらつしゃるよつて)

先ほどまで人足たちの中に存在していた己への壁　圧倒的な強者への恐怖心を、それがたとえ一時的な物であつたとしても、これほど軽々と取り去るとは。

今後の参考にしたいくらいな、実に見事な手際だった。

それに空元気の空笑いとはいえ、笑ったおかげで、聞こえてくる物騒な響きへの過剰な恐怖心も少しは治まつたようであつた。

人足たちが恐慌にとらわれないよう、監督と協力して当たらねばと考えていたのだが、もはやその必要はあるまい。

ダーヴィッツはそつと頭礼した。

するとディアロはにやりと笑つて言つた。

「それより、アンタの避難誘導、まったく堂に入つたもんだつたぜ。的確で素早い判断だ」

「いえ、それもディアロさん、貴方が時間を稼いでくださつたおかげです。どろか一人での数を殲滅されるとは……」

実際、驚嘆すべき戦果だつた。

商売柄、傭兵や軍人、冒険者などの戦いを生業とする人々は数多く見てきたが、それでもこれほどの使い手は滅多にいない。

(ベネンシア卿と好い勝負ができそうですね)

親交のある衛兵隊の中隊長のことを考える。

恐らく、あの槍を得意とする若い騎士は、今頃はあの喧騒のビックで槍を振るい、指揮を執つているのに違ひなかつた。

一陣。

飄風が舞つた。

鉄の穂が揺れる都度、生命が刈り取られていった。

振るうのは一人の騎士で、振るわれるは鎌ならぬ一本の鎌槍だった。

女騎士は 兜に隠れて顔の形は知れなかつたが、鎧を着込む暇は無かつたのだろう、黒革の胴着の下のなめらかな体の線は女性特有の形をしていた。

顔の造作の上手下手は判然としないが、全体として、形の好い娘だった。

どこかが特に目立つて美しいということもないのだが、とにかく姿勢が整つてゐる。

足運びも見事なもので、爪一枚ほどとはいえ積もつた雪に足跡は目立つ。多数を相手取つての乱戦ともなれば尚更だ。だといふのに、彼女の足元のそれは、驚くほどに乱れてはいなかつた。

体幹の制御が抜群なのだろう。

そしてそれは上体にも及んで、彼女は實に巧みに槍を操つた。ある時はホウキで小石を掃くような気軽さで足を払い、またある時はハタキで燭台の埃を撫で落とすようにして、軽く腕を叩いて攻撃を逸らした。

そして、どちらかと言えば小柄な部類に入るであろう体躯から繰り出される、一見緩やかな、その実は暴風めいた直幹の一突き。

地母神が揮う 疾癪の鎧 もかくやあらん。

水面の下から現れた醜悪な蛙面の妖物たちが、地面の上に次々と尻を重ねていく。

なまじつか彼女と相対する怪物たちが、鈍や槍の長柄の武器を小器用に扱うものだから、人妖双方の技倅の奥行き、得物の掌握、動

作の美しさ、その差が酷く際立つた。

女は彼女の槍が届く領域を完全に支配していた。

だから、その空白も彼女が狙つて作り出した物だった。

槍者は橢円を描くように槍を振るつて、怪物たちを何歩か退かせると、自身もまた少し敵から距離を取り、周囲を一望して、ふいに声を張り上げた。

「怪物との戦いに不慣れな者は！ 無理をして一対一で戦おうとするな！ 周囲の者とで連携し、一体ずつ確実に仕留めて行け！」

喧騒の中にも良く通る印象的な声だった。

大声で指示を出すことに慣れている人間の発声だ。

若々しい、甲高い声音。

カラビンカやメロードの血統が備えるような、音楽的に美しい声といつのとはまた少し違うが、多くの人間が魅力的な声だと評価するだろう。

応！ と周囲の部下たちが応えた。

あまりにも一人、隔絶した技を有するがために、他の者たちの影をすつかりと薄いものにしてしまつていたが、彼女も別に一人で戦つていいわけではなかつた。

それどころか、実際には自身の武技を惜しげもなく披露する傍ら、そこまでの戦闘技術を持たない一般の兵士たちを助け、時に怯みそうになる部下たちを叱咤して、怪物迎撃の戦いを指揮していく。

彼女は名をベネンシアと言つた。

ベネンシア・ファン・オルドス。オルドス荘の主にして、アイレンベルク衛兵隊の中隊長の任を拝する若き騎士であった。

衛兵隊はアイレンベルク市内およびに辺境伯領内の治安維持と領民の安全保障を担当する部隊である。

都市内部に侵入者があつた時に備えての訓練も 半ば形骸化していた嫌いは否定できないが、それでも想定はされてきた。今こそそれを活かす時であつた。

若き隊長の命じるところに、四十名ほどの部下たちは好く応えて奮戦した。

その多くは実戦経験を持たない警邏の兵だが、オルドス家子飼の生え抜きたちを、班長として小集団の取りまとめに配してあるので、その点はあまり心配していなかつた。

彼らが上手く差配してくれるだろう。

不安要素があるとすれば、兵員が定数を大きく割り込んでいることと、自分もそうだが、突然の出来事に押つ取り刀で出動するのが精一杯で、装備が不十分 特に身を護るのに欠かせない甲冑が貧弱な所か。

非番だった者の中には、よほど慌てていたらしく、肌着に火かき棒だけを持って駆けつけたような者までいた始末だつた。

流石にそれは、あまりにあまりと言うものなので、内心大笑いしそうになつてゐるのを隠して、強いて作ったしかめつ面で、叱りつけて装備を整えさせに戻したが、

ベネンシア自身、槍を掴み、鉄兜を被つた他は、黒い革製の胴着に同色の脛当と普段通りの姿である。

「もつとも。防具を身に帯びていないのは敵も御同様らしいがな。それに、見る！ 幸いに人間型の生き物連中だ。日頃鍛えた人間相手の戦法を、ある程度までは、そのまま素直に応用できるぞ」

相変わらず顔は見えないが、兜の奥には笑つたような気配があつた。

あるいは作り笑いかもしれなかつたが、皆に聞かせるように、勇ましい笑い声で語りかける。

「考えてみる。日々の訓練では間違つても最後までは行えない、殺人技の数々を、実地で試す好い機会だぞ。遠慮は要らん。存分にやれ！」

「

ベネンシアの物騒な激励に部隊の一団は勇猛に笑つた。
足を突けば動きが鈍るし、腕を叩けば武器を取り落とす。頭部を潰せば息の根が止まる。簡単だうと豪快に笑つた。
もちろん、言つている本人を含めて、誰一人本当に「簡単」だと考えてなどいないのだが、皆、それを信じた振りをした。

「ただし！ 繰り返すが、くれぐれも一対一で敵そんなんて考えるなよ？ 無茶をして、怪我をするなど阿呆の所業だ。どうせ、騎士道精神を發揮したところで、應えてくれるような連中ではあるまいからな」

そう指示を下す本人は、一人で複数の水妖を向こうに回して戦つていたわけだが。

そこかしこから「自分たちは騎士じゃありませんので」「隊長殿は阿呆つてことかいな」「怪我一つないんだから阿呆つてことはないんじゃないのか？」「なら馬鹿か」「槍馬鹿だな」「あと馬鹿騎士だ」「違ひない」と信頼に満ちた野次が飛び交う。

「おい！ 聞こえているぞ。それより一人どいつだ、馬鹿騎士とか言つた奴は。せめて順番を変える。それだと意味が変わつてくるだろ？」「が」

ベネンシアは苦笑を浮かべた。

この連中と来た日には。

まあ、これだけ軽口を叩く余裕があれば、なんとかなるだろ？
そう思つた。

それに、部隊の定員割れについても、ここ百年と言つもの、戦争中を除いては、定数を満たした試しは無かつたので、あまり気にしてはいない。

元々、川べりや運河沿いの比較的開けた場所とはいえ、野外とは比較にもならないほどに狭い街中での戦いである。数ばかり多くても、多分かえつて被害が大きくなつただけだろつ。

そう考えれば、ここにいる者たちは、自発的に兵役に服している分、士氣も高く、戦いの技も練れている。

日々の警邏の仕事を通じて街の構造を熟知しているのも大きい。他の所で戦つているはずの余所の騎士家率いる部隊の数々も、その点は一緒に違ひない。

また、装備の不十分は大いに不安とする所だが、それとても、街を流れる川の中から現れた怪物などという想定の専外の事態に、まがりなりにもよく対応したと褒めてやりたい。

アイレンベルク衛兵隊オルドス中隊は勇猛果敢に戦つた。対する怪物たちは、数こそ多いものの結局は鳥合の衆だった。それに、恩賞目当てだらう。

街に滞在していた冒険者や傭兵といったゴロツキ連中も、勝機ありと見たらしく（勝ち目がないと判断すれば、さつさと街を見捨て別の場所に向かっていたに違ひないのだが）、いつのまにか戦列に加わっていた。

翼を備える飛天の銃使いが上空から急降下してはまた空に舞い上がり、地上では巨漢の獣人が大剣を振り回しては当たるを幸い、怪物を薙ぎ払つていた。

遅れて出て来ただけあつて、装備も万全である。

ドワーフは得意の魔法の道具を駆使して、メローの呪術使いが川の水を操つて上陸しようとする足場を滑らせ、水の手で怪物の首を絞め、それぞれに殺していく。

わざわざ荒事に首を突っ込んでくるだけあつて、揃いも揃つて腕利きだつた。

だんだんと各個撃破されて、化け物はその数を減らしていく。

(なら最初から出てきやがれ。とは言え助かつたのも事実か)

内心で軽く呪詛を送つたりもしたが、感謝していたのも事実である。

「 各々方！ 御助力感謝いたします。事が収まった暁には必ずや、都市より御礼の沙汰がありましょ。 まあ、あと一息、共に手を携えて、力を合わせ、怪物の掃討と参りましょ！」

日頃、ベネンシアの口からもれる言葉といえば、砕けた物ばかりなので、部下たちは目を白黒させたが、彼女とてこれくらいは普通に言える。

口にした当人がかなりの違和感を覚えていたのも確かだが。なお、御礼の沙汰としか言わないのが味噌である。

ふと、ベネンシアは妙な気配を感じた。

それは難敵との戦いの予兆を嗅ぎ取る、鍛えぬいた戦士に備わった嗅覚だったかもしれない。

己の勘を信じて、水辺に近い兵たちを急いで下がらせた。
と、ほどなく水面が激しく波打つた。それはやがて巨大な渦巻きへと成長した。

それが、ベネンシアの視界の中にある分では三箇所。

大渦から巨大な腕が飛び出した。次いで頭部が出現し、両手を使って穴から這い出るようにして、胴体、脚部と現れてくる。
実際、這い出しているのかもしれなかつた。
明らかに川の水深より身長が高い。

それまでの雑兵に数倍する体格を誇り、禍々しくも美々しい武装で身を飾った、巨大な怪物だつた。

ひょいと巨体に見合わぬ軽やかさで飛び上がり、上陸した。地が揺れた。

「種族の勇者か、上位種族つてどー?」

声を作るのを忘れて、素の声で呟いた。
途端に少女めいた声になつた。

凍りついた緊張と、裏腹な熱狂とが場を満たした。

妖魔たちは貴顕の降臨を歓呼して迎え、人間たちは大物の登場に迂闊な手出しを躊躇つた。

どちらからともなく一步下がり、二歩下がり、距離を保つて敵対者たちは互いににらみあつた。

しばし戦闘は中断された。

指揮官としてベネンシアは改めて戦況を確認した。

ほとんどが大小の怪我を負っていたが、死者や深刻な負傷者はまだ出ていなかつた。

対する魚妖は既に大半が駆逐されていた。
ベネンシアは改めて戦慄した。部下たちも少なからず動搖している。

何故逃げない。

これが尋常の戦いであれば、衛兵たちの勝利でとっくに決着がついていただろう。

けれど、攻め手は微塵も諦める気配を見せなかつた。

それどころか戦意はますます高まつてゐる。

それが新しく戦場に現れた巨大な海魔の威を受けての物であることは明らかだつた。

ベネンシアは上陸した海魔の巨体を仰ぎ見た。

紅鱗で身を飾つた巨人である。あるいは巨大な魚人と言うべきか。揺れ動く篝火の灯に全身の鱗が妖しく光り、相応に巨大なエラ蓋が前後に動いた。

先行した雑兵たちは直立した蛙を思わせたが、新たに現れた巨大な怪物たちは、見た目はより魚に似ていた。

ただし四肢を有するなど完全な魚というわけではなかつた。

前者が鱗の生えた蛙だとすれば、後者はやはり鱗の生えた山椒魚

に喩えられるだろう。

不思議と蜥蜴めいた印象はなかつた。

まばたきをする機能を持たない真円の瞳は、いかなる感情も読み取らせはしなかつたが、底知れぬ異界の知性を窺わせた。眼の上に目蓋はなく代わりに半透明の膜が覆つている。

水中生活者の瞳だ。

異形である。けれども醜悪ではなかつた。

中でも三体中の主導的立場を占めるらしい一体の威風堂々たる立ち姿は高位の貴族とすら想わせた。

雪の舞う川縁に紅鱗の魚怪が立ち上がつた。

畏怖すべき異界の美。

身の丈およそ三十スー（7・5メートル）。

当然胴回りもそれに比例して立派だった。

そして重量を支えるに足りる大柱のような後ろ足。

これまでベネンシアが遭遇した怪物の中で最大の存在は、身長二十スーの丘巨人。槍が風を切り、棍棒が丘を平らにした熾烈を極めた一騎打ちの末に打ち倒した。であつたのだが、その記録を軽々と塗り替えていた。

さらに言えばただ大きいだけの野獸ではなかつた。

豪壯でもあり絢爛でもある黄金色の甲冑に身を包んでいた。

よもや本物の黄金のはずはないが、希少性云々の前に、柔らかすぎて武器防具に適さないのもさることながら、重すぎて泳げまい。しかし、黄銅というわけでもなさそうだった。

付与術師がよくやる、金箔や鍍金を触媒として黄金の不滅性を仮初に与える技法か、鍊金術師が作りだし、強度こそ僅かに鉄に譲るもの、同体積で三分の一の軽さを誇る合金、黄金の鉄の産物だろう。

そして、手にするのは精緻な細工が施された三叉の槍。ベネンシアはしばし槍の美しさに心を奪われた。儀礼用の風格と戦陣用の威風を兼ね備えている。

武器甲冑ともに名工の作と思われた。

一方、小さな方は僧服めいた物を纏っていた。

こちらは一転して質素な作りである。

体躯も鎧武者に比べればだいぶ劣る。鱗もくすんだ黒に近い灰色だった。

それぞれ十スターほどであり、その者たちも既に巨人の形容に相応しい巨躯であったが、それとても、主領格の一体を前にしては、まるで小人のようだった。

もつとも、すぐ傍らに立つ比較対象が巨大すぎるばかりに起つた錯覚に過ぎないのも明白ではあつたが。

雪はいっくらか勢いを強めていたが、みぞれが田立ちはじめてもいた。
そのうちに完全な雨降りに取つて代わられるだろう。
そのせいで、地面は氷菓子を一面にこぼしたようなありさまだった。

転倒の危険が高い。足元に注意しなければならない。

雪の音と雨の音に、撒き散らされる水の音が混ざった。

海魔の巨大な体や武具甲冑から落ちこぼれた水が、ぱしゃぱしゃと勢いよく飛び散ったかと思うと、辺りを漂つ空気に、もわっと生臭いものが混じった。

まともに嗅いでしまつた者たちが思わず咳き込んだ。
強烈な臭いに、ベネンシアも思わず身を反らせた。
これは……。

生魚の臭いに似ていたが、恐らくそれだけではない。

「こいつは潮の匂いだな」

男臭い重厚な声が響いた。

誰か近づいてくる気配にベネンシアが振り向くと、銀毛豊かな獅子頭の戦士が歩み寄ってくる。

先ほど確認した傭兵ないし冒険者の一人だ。大剣と大盾を使って縦横無尽に戦っていた。ベネンシアがその名前を知るよしもなかつたが、ディアロ・エウインである。

「まさかこんな内陸で嗅ぐことになるとは思わなかつたが。いんや、不意打ちだつたもんだから、実際以上に刺激が強いのか」

男はかなり閉口した様子だつた。

「……潮？ すると海か。海というのはこんな臭いがするものなの？ 鼻が曲がるかと思つた」

嗅ぎ慣れない臭いに、軽くえづきを覚えながら、不快げな表情で、だとすると海辺の街とはよほど過酷な環境に違ひない、とベネンシアは思つた。

ディアロは苦笑いらしき物を顔に浮かべた。

「まあ、普通はここまで強烈な臭いはしないんだがな。ほれ、大部分は奴さんらの体臭と甲冑にこびりついた臭いだな」

銀色の人獅子。ディアロは顎をしゃくつて怪物たちを示した。

「ところでアンタがベネンシアさんだね？ 槍の達人で、一目見れば判るでしようつて話だつたが、まさにだな。おつと、言い遅れた。ダーヴィッシュの旦那から、アンタを手助けするように頼まれてな。もし出会いことがあれば、ベネンシア卿の与力に入つてはもらえ

ませんか』つてね

「そうか。アーネスト小父が」

フルネームはアーネスト・ダーヴィッシュである。旧知の人的好意に、ベネンシアは心地好い感情が沸き起るのを感じた。

「まあ、実を言えば、アンタがあまりに強いんで『おいおい。こいつは手助けの必要なんてなさそうじゃないか。終わってからノコノコ出でくのもバツが悪いし、いつそ出会えなかつたことにしようか』なんてことを、さっきまでは考えてたんだが。幸か不幸か、大物の登場で、お役に立てそうだと思い直して、こいつやって参上した次第だ」

「冗談ともつかない」と一息で言つ。

「しかし、なんだつてまた神格への階に片足つっこんだような輩が」

解せない。とディアロは小声で独白した。

「アナタはアレが何か知つているのか？」

「ありやあ、海魔の上将軍だな。それと坊主が一体か。なんでこんなところに居やがるのかは知らないが」

シー・ジェネラルにシー・モンク。

ベネンシアの問いにディアロは簡単に説明した。

最初に登場した蛙面が海魔の奴隸階級だとすれば、後から現れたのは海魔の貴族。つまり祭司・戦士階級である。

「僧正級ではなさそうなのが救いだね」

また一つ声が加わった。呪術師風のメローがひょっこりと混ざってきた。

「だなあ。連中、陸地に海を召喚しやがるからな。それとして、潮を薄めてくれたのはお前さんってことで好いのかい？」

「俺とあっちのドワーフの旦那が半々ってとこかな」

二人の口ぶりからすると、悪臭が消えているらしくベネンシアは驚いた。

というのも彼女は未だに悪臭に悩んでいたからで、もしや鼻がイカレタかと大いに焦つた。

だが、ふとベネンシアはあることに気づいて兜のバイザーアゲた。

大気が消臭される前に入り込んだ臭いが、兜の中に籠もっていたのだ。

思いつきり深呼吸をした。

「へえー、これは驚きだね。隊長さん、随分と美人さんじゃないか

メローは口笛でも吹きそうな勢いで称賛した。こささか軽薄な性格をしているらしい。

実際、ベネンシアはなかなかの器量を誇った。

北国の女性らしく色白で、耳や唇、眉の形も整っている。平均より幾分か大きな鼻はいささか高圧的にも見えそうだったが、たれ目ぎみの淡い瞳が、ちょうどよく釣り合いでいた。

小柄であることも相まって、おつとりとした良家の娘風の美貌である。

惜しむらくは、中身は淑やかという言葉とは無縁であつたことか。

「当然」

ベネンシアは称賛を軽く受け流した。

「あらまつ。それで、話を戻すけど。獅子の兄さん、やりあつたことがあるって口ぶりだね」

「東のほうで何度も。儂は普段はパルマを拠点にしてるんだわ」

ディアロが口にした言葉にメローは納得した様子でうなずいた。

『探求者の街』パルマ。

大陸東海岸の港町である。都市を上げて航路の開拓や遠征を行つており、妖魔との抗争もしばしばと聞く。

「洞窟の中の祭場が突然海に変わつた時は溺れ死ぬかと思つたもんだが、後で聞いた話じゃ沙漠ですら可能だつてんだから、こんな川辺の街くらいお手のもんだろうなあ」

ディアロの危惧を含んだ嘆息に、メローは笑つて言った。

「いやいや。川や泉は淡水、真水だから。水神の影響が強いもんだから、かえつて海を呼ぶのは難しいと思うよ。オマケにこの街には 水靈王 を祀る大伽藍が建つ聖地の一つだし」

「なるほどなあ」

今度はディアロが納得した。

彼らが暢気に話していられるのには理由があつた。

武将を筆頭に三体の高位海魔たちは、衛兵や冒険者にはほとんど注意を向けてこず襲い掛かつてくる気配を見せていかつた。

出現からこつち、ずっと何かに気をとられていくように見えた。

「悪いんだけど。アナタ方は一人して何か分かり合っているみたいだけど、自分にはまつたく何が何やらなんだけれど。結局、あの三体は上位の種族で、恐ろしい魔法を扱う僧正がいないから少しはマシって理解で良いわけ？」

「いやあ。それがなあ」

ディアロは少し困ったよつて苦笑いを浮かべた。

「たしかにそういう意味では不幸中の幸いではあるはずなんだが。あの将軍様がどうにもまずい。」とによると、僧正が群れをなして襲い掛かってきたのはマジだったかもしれないくらいだ」「本當、長生きしていらっしゃりそうで」「どうじつこと?」

「あの連中に寿命があるのかどうかは知らんがね。歳を重ねる毎に際限なくテカくなつて行きやがる。そういう種族だ。だもんで大きさで大体の年齢が解るんだが、ふむ、あの大きさだとさうかな……八百年、いや、もう四五十年は生きてそうだな」「それはまた随分と長生きする種族だな」

ベネンシアは目を丸くした。しげしげと海魔の上将軍を眺める。妖精や竜の血族などには数百年、数千年を生きる者も少なからず存在すると聞き及ぶが、実物を目前にするとやはり驚く。

「まず当たり前の話だが、巨大な体つてのはそれだけで脅威的なものさ。だが、あの連中が厄介なのは、それとはまた別のところでな」「ついえば、さつき『神格への階』がどうのと」

呟いていた。

その時も気になつたのだが、話の流れに任せて忘れていた。
物騒であるし意味深な響きもある。

「成るんだよ。竜にな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9066v/>

水底の夢

2011年10月8日03時10分発行